

## 連載 ◆ コラム ◆ 観光ボランティアガイド

写真1 地域地理学での酒蔵地区見学。50余名の受講者に8人のガイド、2007年12月15日。

||||||| 広島県東広島市

# 酒蔵立ち並ぶ 学園都市のボランティアガイド

浅野敏久



東広島市は、広島県中央部に位置し、人口18万4430人（05年国調）、面積約635km<sup>2</sup>の地方都市である。今の市域は、05年の合併によるもので、平成の大合併により市域は2倍以上に広がった。もともとなった東広島市も成立は新しく、1974年に西条町、八本松町、志和町、高屋町（合併時の人口約6・3万人）が賀茂学園都市建設の受け皿となるために合併して市制を敷くことになった。

東広島市はいくつかの特徴的な性格をもっている。第一に、広島大学をはじめ4大学の立地する学園都市という側面、県内で広島市、福山市につぐ工業出荷額等（07年に1・4兆円）をあげる内陸工業都市の側面、それと広島市の郊外住宅地という側面があり、いずれにせよ新興の地方都市であり、合併を繰り返すなかで、地域的な一体感の乏しい地域にもなっている。水系もいろいろで、広島湾に注ぐ太田川水系、瀬野川水系、只に流れる黒瀬川水系、

三原方面に向かう沼田川水系、さらには日本海に注ぐ江の川水系もあるなど、流域的なまとまりもない。

そのようななかで、市を特徴づけるものとして注目され、利用されてきたのが、旧西条町にまとまって立地している酒蔵および地場産業としての酒造業であった。地元では「日本三大醸造地の一つ」である酒都・西条、醸華町・西条をうたい文句にして、地域の個性をアピールしようとしている（写真2）。

西条の酒蔵地区は、20万都市の玄関口とは思えないほど商業集積の乏しいJR西条駅周辺に広がっている（図1）。酒蔵地区には、現在、酒造会社が8社あり、酒蔵や古い町並みが軒を連ねている。

## きっかけ

東広島市の観光ボランティアガイドは、この酒蔵地区を拠点として活動を始めた。酒蔵地区の住民が中心に担っ

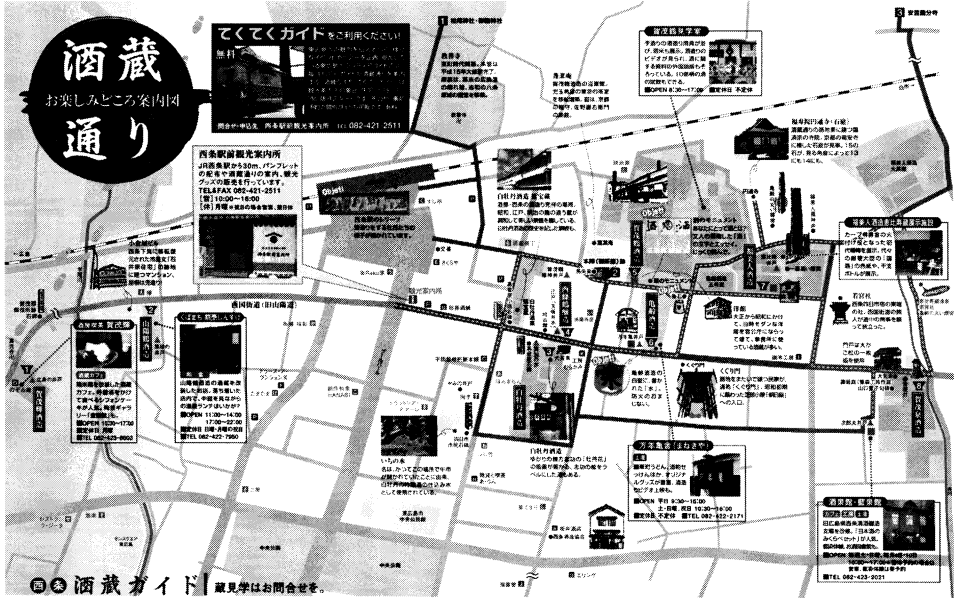


図1 酒蔵通り案内図  
東広島市観光協会作成のガイドマップの一部分。同観光協会からファイル提供。

ているというよりは、この地区に魅力を感じた新住民や周辺住民が関心をもち、訪れる人たちに紹介する形で継続されている。東広島市観光協会が主催した「ボランティアガイド養成講座」(1996年)がきっかけとなり、翌年から、最初の受講者4名によって実際の活動がはじまった。その後も2年ごとに養成講座が重ねられ、55名のガ



写真2 酒祭りの賑わい、2008年10月11日。

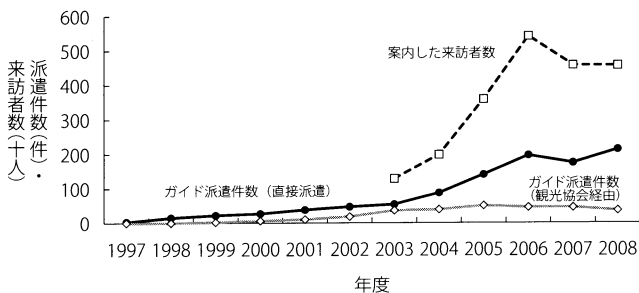


図2 ガイド派遣回数および案内した来訪者数

「ボランティアガイドの会」提供の資料により作成。ガイド派遣件数には観光協会からの依頼によるものと「ボランティアガイドの会」が直接行うものがある。2005年から急に増えた背景として、2004年から06年までの広島県による大型観光キャンペーンや2005年の呉市・大和ミュージアムの開館の効果がある。

イドが登録されている（2009年6月現在）。  
おもな活動として、毎月10日に「てくてくガイド」と称する酒蔵地区を案内するツアーを行っている。1日20

この10年ほどの活動とまちの反応をみてきた実感として、街が変わりつつあると感じる。  
はじめの頃は、ガイドが勝手に街を案内しているような感じで、休日なので休業している酒蔵を外から眺め、実習で来ている自分たち以外に見学者などまったくいなかった。し

### 街が変わった

筆者は2002年から、教養科目の講義の一部としてガイドの方に酒蔵地区の案内をしてもらっている（写真1、3）。

50人、年間数百人の参加者がある（図2）。その他、依頼があれば随時ガイド活動を行うほか、JRの観光キャンペーンがあったときには、土日の午前午後それぞれ案内ツアーを行うなど、出勤回数はかなり多い。駅前の観光案内所に誰かがつめており、ガイド活動以外に通常の観光案内を行っている。



写真3 酒造会社のはね戸について説明を聞く学生、2005年11月20日。

かし、そのうち、地道なガイド活動がこの地区に人びとの関心を引きつけるようになって、酒造会社が休日でも酒蔵を開けるようになり、やがて、酒蔵での販売や土産物販売、イベントを行うようになった。さらに、いつ行っても、多くはないものの街を見学している人をみかけるようになった。ガイド活動が、街を変えていく陰の力になっ



写真4 各酒蔵での試飲コーナー。未成年の学生実習では不可だが一般には人気。2008年1月27日。

たと評価している。

また、酒蔵地区の案内から始まった活動ではあるが、活動範囲はそこにとどまらず、合併で広域化した市内全域が意識されるようになってきている。例えば、西国街道を歩くとか、地元の歴史的なトピックスの現地を歩くといった「歴史探索ウォーキング」を企画して案内し、地域内外の歴史愛好家や、自分の住む地域に興味をもつ家族連れなどが、数多く参加する恒例行事になっている。

広域合併後は、地域的なまとまりがみえにくかったり、日常生活面での交流があまり進みにくかったりするなかで、だれよりも早く、地域内交流の担い手としての具体的な行動を起こした。それが、年数回実施される市内探訪バスツアーで、毎回テーマを設定し、市内各地の観光スポットや施設を見学して回っている。参加希望者は多く、抽選になっているらしい。このような案内先を広げるにあたって、すべてを自分たちで案内するのではなく、訪れた先々で、そこで活動している人や施設の関係者などから話をしてもらうこともあり、市内見学のコーディネートのような役割を果たしているともいえる。筆者が務める広島大学なども格好の訪問先になっている。

ガイド養成そのものを自分たちの活動として行っているが、一般的なガイド養成にとどまらず、子どもガイドの育成など、学校教育と連携した活動も行われている。子どもたちによる酒蔵

地区の案内など、新聞やCATVでも取り上げられ、ほほえましい光景がみられる。

東広島市の場合、観光ガイドという活動ではあるものの、対象となる人は、遠方からの来訪者に限らず、かなりの部分を地域住民や近隣住民が占める。新しい都市で、大学や工場などに関係する新しくこの地に住むようになった人が多く、市内観光の観光客にあたる人たちに東広島市民が多い<sup>2)</sup>。これは東広島観光の特徴でもあり、観光というより、レクリエーションの一環、地域学習・生涯学習の一環のような行動といえ、それらを包括した意味でのガイド活動といえるのである。加えて、東広島市のガイドは、酒蔵地区という特定の場所を拠点として活動する面と、600kmを超す広い東広島市における地区間交流のつなぎ役として活動する面とをあわせもっているところが面白い。

## 大学側の新しい動き

最後に、広島大学では、2007年からキャンパス内で東広島観光展という行事を行っていて、その際、ガイドの方に会場に来ていただき、会場内で地図と観光写真などのパネルを前にして、案内活動を行ってもらっている。

また、筆者以外にも、通常の講義などでガイドと関係をもつものはあるだろうし、学会などではしばしばエクスカーションで協力してもらっているようである。

近畿大学工学部では、東広島学という公開講座を毎年行っているが、そこ

でもガイドの方々が1講義分を担当している。また、市内の留学生や大学生を対象として、東広島市内を案内するバスツアーもガイドの活動として行われている。このように、大学が地域とかわる活動のなかで、ボランティアガイドがかかわる場面がかなりあるということは、学園都市ならではの観光ボランティアガイドのあり方といえるかもしれない。

### [注]

- (1) 浅野敏久(2008)「エコミュージアム概念の伝わりにくさ」エコミュージアム研究13、52～58頁に講義内容や課題などを書いている。  
 (2) JR西条駅前の観光案内所(ボランティアガイドの詰め所)を訪れた人の内訳として、2

008年度は、東広島市民が4067人(21.1%)、その他県内が6859人、他県が7648人であった(「ボランティアガイドの会」調べ)。これは観光案内所を訪れている人なのに、実際に市内観光をしている東広島市民はるかに多い割合を占めると考えられる。  
 (3) 広島大学東広島広域観光研究グループ(代表:浅野敏久)編(2006)「合併後の東広島市がめざすべき観光振興のあり方検討に向けた基礎的調査と方策」平成17年度広島大学地域貢献研究報告書。

あさのとしひさ・広島大学大学院総合科学研究科准教授 1963年東京都生まれ。東京大学大学院理学研究科地理学専攻修士課程修了。博士(学術)。人文地理学が専門。主著『宍道湖・中海と霞ヶ浦』古今書院。本誌書架委員。

## 風景の「価値」と「意味」を読む

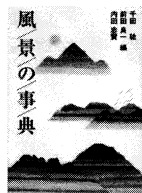
# 風景の事典

110の風景を約4千字で論じたユニークな事典。自然から歴史・文化まで、日本の風景の意味を探る。原風景／絶景／銀座／下町／田舎／リゾート／トンネル／川／浜辺／坂／里山／歴史街道／寺町／神社／橋／ニュータウン／港／祭り／ホテル他

千田稔・前田良一・内田忠賢

2730円

編



風景の事典